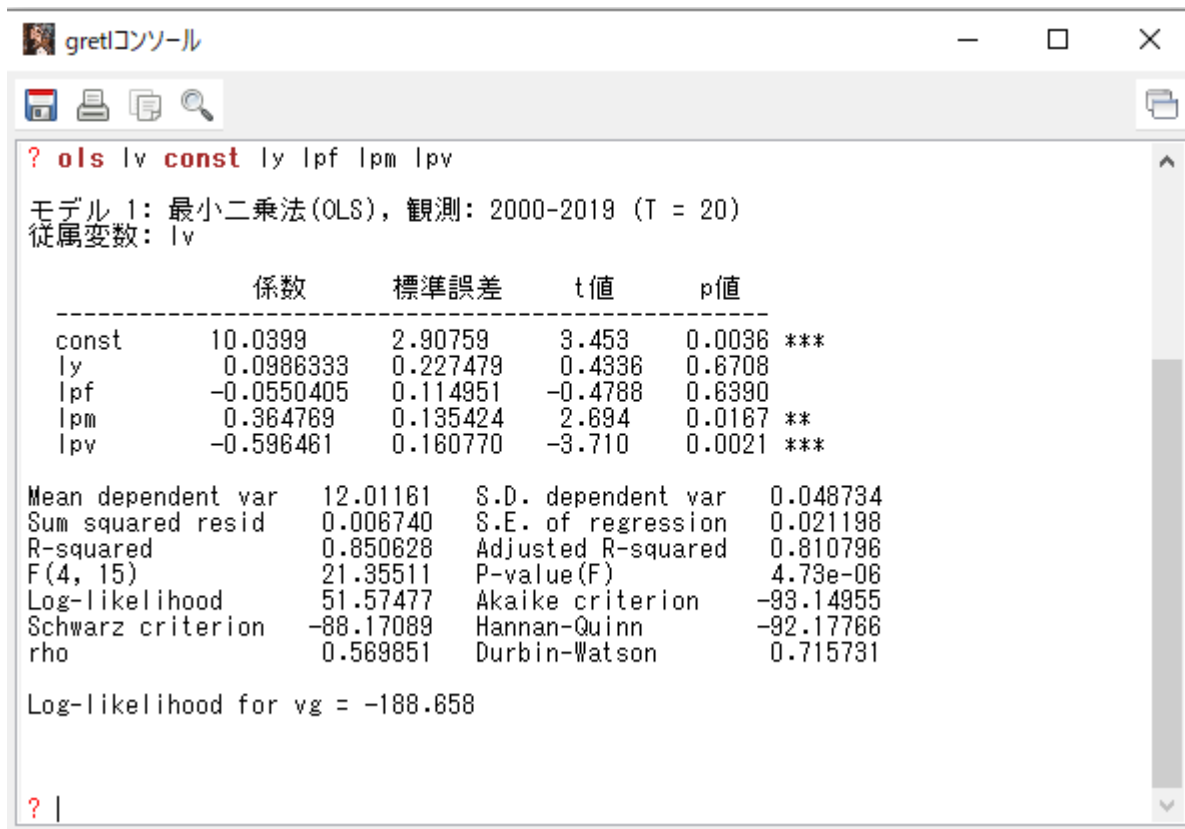


## 「生鮮野菜」の需要関数の推定

? ols lv const ly lpf lpm lpv →  $lv_i = \alpha_0 + \alpha_1 ly_i + \alpha_2 lpf_i + \alpha_3 lpm_i + \alpha_4 lpv_i + u_i$



```
? ols lv const ly lpf lpm lpv
モデル 1: 最小二乗法 (OLS), 観測: 2000-2019 (T = 20)
従属変数: lv
```

	係数	標準誤差	t値	p値	
const	10.0399	2.90759	3.453	0.0036	***
ly	0.0986333	0.227479	0.4336	0.6708	
lpf	-0.0550405	0.114951	-0.4788	0.6390	
lpm	0.364789	0.135424	2.694	0.0167	**
lpv	-0.596461	0.160770	-3.710	0.0021	***

Mean dependent var	12.01161	S.D. dependent var	0.048734
Sum squared resid	0.006740	S.E. of regression	0.021198
R-squared	0.850628	Adjusted R-squared	0.810796
F(4, 15)	21.35511	P-value(F)	4.73e-06
Log-likelihood	51.57477	Akaike criterion	-93.14955
Schwarz criterion	-88.17089	Hannan-Quinn	-92.17766
rho	0.569851	Durbin-Watson	0.715731

Log-likelihood for vg = -188.658

Log-likelihood 51.57477 ← 対数尤度関数

(データ数が大きいときの尤度比検定にはこれを使う)

その下の「Log-likelihood for vg = -188.658」は見なくてよい。

## 推定結果の解釈：

- ・ 所得弾力性が 0.0986 と小さく， t 値も 0.4336 とゼロに近く， p 値も 0.05 より大きい。

→ 生鮮野菜は所得変化に反応しない → 所得が増えても減っても野菜は必要

- ・ 自身（野菜）の価格弾力性は-0.596 で， t 値は絶対値で大きく， p 値は 0.01 以下

→ 野菜の価格は野菜の需要量に影響を与えるが，価格変動ほどには需要量は変動しない → 必需品

- ・ 生鮮魚介の交差弾力性は-0.055 で， t 値は小さく有意ではない

→ 魚介は野菜の需要量に影響しない

- ・ 生鮮肉の価格上昇（すなわち，生鮮肉の需要量減少）は野菜の需要量増加

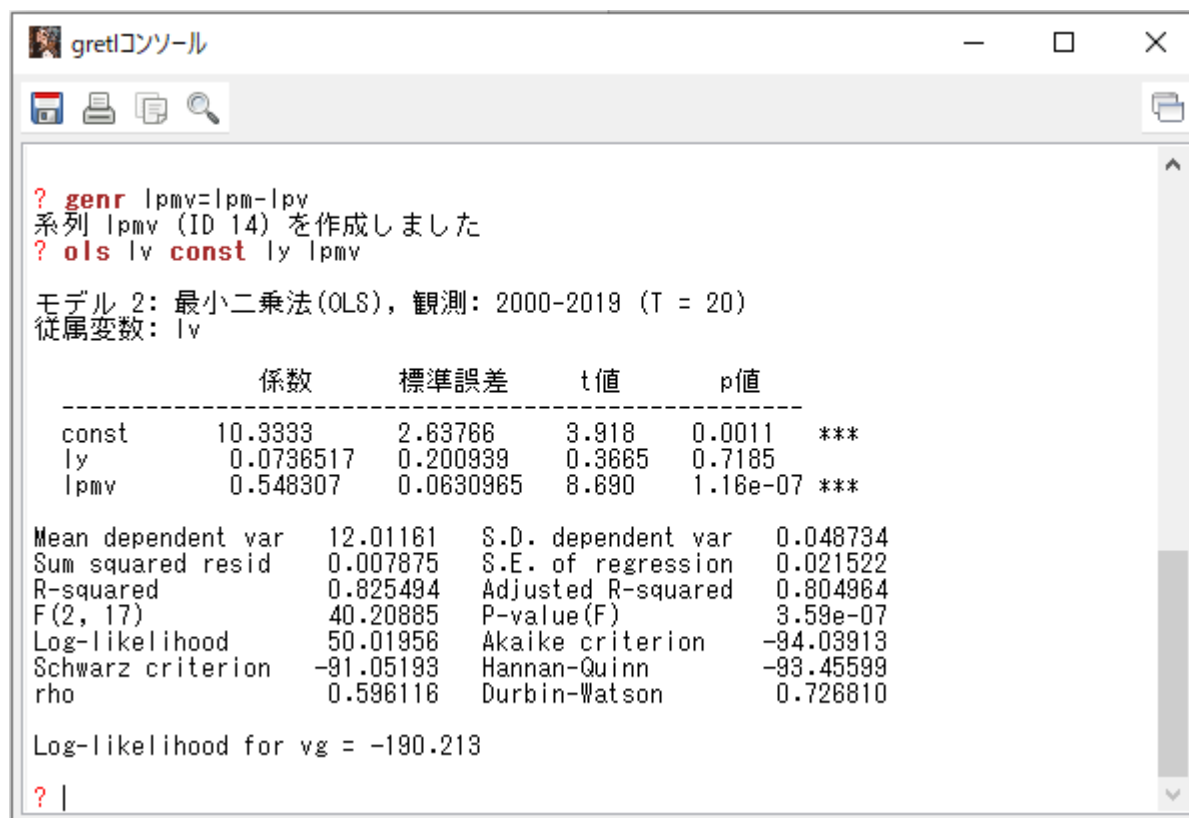
→ 肉は野菜の代替財（本当か？ どちらかと言えば補完財では？）

検定： 帰無仮説： $\alpha_2=0, \alpha_3=-\alpha_4$  → 制約数  $G=2$

データ作成&推定：

? **genr** lpmv=lpm-lpv

? **ols** lv **const** ly lpmv →  $lv_i = \alpha_0 + \alpha_1 ly_i + \alpha_3(lpm_i - lpv_i) + u_i$



```
? genr lpmv=lpm-lpv
系列 lpmv (ID 14) を作成しました
? ols lv const ly lpmv

モデル 2: 最小二乗法(OLS), 観測: 2000-2019 (T = 20)
従属変数: lv

      係数      標準誤差      t値      p値
-----
const    10.3333    2.63766    3.918    0.0011 ***
ly        0.0736517    0.200939    0.3665   0.7185
lpmv     0.548307    0.0630965    8.690    1.16e-07 ***

Mean dependent var    12.01161    S.D. dependent var    0.048734
Sum squared resid     0.007875    S.E. of regression    0.021522
R-squared              0.825494    Adjusted R-squared    0.804964
F(2, 17)              40.20885    P-value(F)            3.59e-07
Log-likelihood         50.01956    Akaike criterion      -94.03913
Schwarz criterion     -91.05193    Hannan-Quinn          -93.45599
rho                   0.596118    Durbin-Watson         0.726810

Log-likelihood for vg = -190.213
? |
```

Log-likelihood 50.01956 ← 対数尤度関数 (制約付き)

●F 検定（残差平方和の利用）： モデル 1 vs モデル 2

制約付き残差平方和=0.007875

制約なし残差平方和=0.006740

$$\frac{(0.007875 - 0.006740)/2}{0.006740/(20 - 5)} = 1.263$$

F(2, 15)の上側 5%点は 3.68 なので、帰無仮説を棄却できない。

●F 検定（決定係数の利用）： モデル 1 vs モデル 2

制約付き決定係数=0.825494

制約なし決定係数=0.850628

$$\frac{(0.850628 - 0.825494)/2}{(1 - 0.850628)/(20 - 5)} = 1.262$$

F(2, 15)の上側 5%点は 3.68 なので、帰無仮説を棄却できない。

F 検定（残差平方和の利用）と同じ結果になるべき

●尤度比検定（大標本）： モデル 1 vs モデル 2

尤度比検定統計値 =  $-2(\text{制約付き対数尤度関数} - \text{制約なし対数尤度関数}) = -2(50.01956 - 51.57477) = 3.11$

自由度 2 のカイ二乗分布の上側 5%点の値 = 5.99

したがって、帰無仮説は棄却できない。

3つの検定方法のうち、この尤度比検定が最も簡単

実践では、上記の検定より、下記の DW による誤差項の系列相関の検定を先にすべき

・  $DW=0.716$

→ 有意水準 5% で、 $n=20$ 、 $k'=4$  のとき、 $(dl, du)=(0.894, 1.828)$

(『計量経済学』(山本拓著), P. 356 の表では  $dl=0.90$ )

→ 誤差項に系列相関あり

→ よって、上の解釈は×

→ コ克蘭・オーカット法で推定し直し

「ar1」と「arima 1 0 0 ;」は同じ推定になる(系列相関のモデルを推定)。

「ar1」では対数尤度関数の値が出力されないなので、代わりに「arima 1 0 0 ;」を用いる。

「ols」と「arima 0 0 0 ;」は同じ推定

時系列モデルで使われる「arima」の詳細は省略

```
gretlコンソール
? arima 1 0 0 ; lv const ly lpf lpm lpv
関数の評価回数: 345
グラディエントの評価回数: 222
モデル 3: ARMAX, 観測: 2000-2019 (T = 20)
Estimated using AS 197 (厳密最尤法)
従属変数: lv
標準誤差はヘッセアン (Hessian) に基づく
```

	係数	標準誤差	z	p値	
const	9.22243	0.0960384	96.03	0.0000	***
phi_1	0.736908	0.179245	4.111	3.94e-05	***
ly	0.172144	0.00920974	18.69	5.81e-078	***
lpf	-0.188195	0.113055	-1.665	0.0960	*
lpm	0.375599	0.122350	3.070	0.0021	***
lpv	-0.491604	0.0937398	-5.244	1.57e-07	***

Mean dependent var	12.01161	S.D. dependent var	0.048734
Mean of innovations	-0.001948	S.D. of innovations	0.014366
R-squared	0.910346	Adjusted R-squared	0.886439
Log-likelihood	56.08716	Akaike criterion	-98.17431
Schwarz criterion	-91.20419	Hannan-Quinn	-96.81367

	Real	Imaginary	Modulus	Frequency
AR				
Root 1	1.3570	0.0000	1.3570	0.0000

検定結果は概ね同じ

モデル 3 は最尤法で推定

z の値と標準正規分布表とを比較

phi\_1 は  $\rho$  の最尤推定値

●  $\rho = 0$  の検定（その 1：最尤推定量の性質，すなわち， $n$  が大きいとき正規分布）： モデル 3

phi_1	0.736908	0.179245	4.111	3.94e-05	***
-------	----------	----------	-------	----------	-----

の推定結果（モデル 3）で  $z$  値 4.111 を標準正規分布表と比較する。

その隣の  $p$  値は 0.01 より小さいので， $\rho = 0$  の帰無仮説を有意水準 1% で棄却する。

→ 誤差項に系列相関ありと判定される

●  $\rho = 0$  の検定（その 2：尤度比検定）： モデル 1 vs モデル 3

$\rho = 0$  の制約付き対数尤度関数（モデル 1） 51.57477

$\rho \neq 0$  の制約なし対数尤度関数（モデル 3） 56.08716

尤度比検定統計量  $= -2(51.57477 - 56.08716) = 9.02478 > 6.63$

（自由度 1 のカイ二乗分布の上側 1% 点は 6.63）

$\rho = 0$  の帰無仮説を有意水準 1% で棄却する。



●  $\rho = 0, \alpha_2 = 0, \alpha_3 = -\alpha_4$  の同時検定 (制約数  $G=3$ ) : モデル 2 vs モデル 3

制約付き対数尤度関数 (モデル 2) 50.01956

制約なし対数尤度関数 (モデル 3) 56.08716

尤度比検定統計量  $= -2(50.01956 - 56.08716) = 12.1352 > 11.34$

(自由度 3 のカイ二乗分布の上側 1% 点は 11.34)

$\rho = 0, \alpha_2 = 0, \alpha_3 = -\alpha_4$  の帰無仮説を有意水準 1% で棄却する。